

Letter for Members

【コンテンツ】

- JPR インパクト・ファクター獲得記念講演会を終えて…… 201
- 第1回補綴歯科臨床研鑽会「プロソ'14」開催報告…… 203
- 第2回疫学調査委員会・学術委員会合同シンポジウム…… 206
- 2014 Asian Academy of Prosthodontic (AAP) 参加報告…… 208
- 支部学術大会報告…… 209

Journal of Prosthodontic Research インパクト・ファクター獲得記念講演会を終えて

インパクト・ファクター獲得記念講演会は昨年暮れ、平成26年12月19日の金曜日、新橋第一ホテルの21階ルミエールにて6つの円卓を囲み開催されました。歴代の理事長、JPR編集委員長、新旧の編集委員や各理事などに分かれて総勢39人が着席のもと、川良総務担当理事の司会で、矢谷現理事長の挨拶により開会しました。まずは、志賀先生からJPR発行の背景や経緯について詳細にご講演頂き、その後歴代編集委員長（横山先生、窪木先生、馬場先生）の講演が続き、それぞれの任期中の委員の紹介を含め、当時、現在の編集委員会の様子をお話頂きました。講演の最後には、新旧全委員に対し感謝状が読み上げられ、代表して現委員長の馬場先生に感謝状が手渡されました。講演終了後は歴代理事長の紹介などもあり、JPRのインパクト・ファクター取得を祝って小一時間ほど小宴が催され、最後の締めでは田中久敏先生から激励と貴重なご助言を賜り講演会は終始和やかな中お開きとなりました。

インパクト・ファクター（文献引用影響率）とは、特定のジャーナル（学術雑誌）に掲載された論文が特定の年または期間内にどれくらい頻繁に引用されたかを平均値で示す尺度です。一般に、その分野における雑誌の影響度を表し、特定のジャーナルのインパクト・ファクターは、対象年における引用回数を、対象年に先立つ2年間にそのジャーナルが掲載したソース項目の総数で割ることによって計算します。インパクト・ファクターが付与された雑誌は、選定プロセスを経て

収録後3年以上を経過した雑誌で、一定の品質保証がされています。

これまで日本補綴歯科学会の悲願であったJPRのインパクト・ファクター取得ですが、最初の申請却下から2年経過した2011年11月に窪木委員長のもと2回目の申請が行われ、他論文から引用されるような質の高い論文の投稿や依頼を積極的に行うなど、前委員会での努力が実を結び、昨年10月に2014年8月付けでJCRに収録されたとのOfficial Letterがトムソン・ロイター社からエルゼビア社に送られてきました。しかも2012年56巻1号から収録されることも後日確認されました。これによって今後のスケジュールは、2012、2013年（56巻1～4号、57巻1～4号）の掲載論文が2014年に引用された状況が今年2015年にJPR first インパクト・ファクターとして公表されることとなります。

インパクト・ファクターは毎年更新されます。すでに昨年末からの広報活動により投稿論文数も伸びており、これからは掲載論文の質、ならびに論文引用への活動をさらに深め、それを継続していかねばなりません。そこで学会では、トムソン・ロイター社が提供する2件のメールサービスを配信することになりました。一つはジャーナルの宣伝用HTMLファイルをJPR関連ジャーナルの著者へメール配信します。もう一つは論文単位の配信で合計10本のJPR注目（スター）論文を関連度の高い論文の著者へ送付します。また、トムソン・ロイター社が管理する文献データベースであ

る Web of Science を編集委員会ならびに事務局において年間購読することになりました。上述したインパクト・ファクターの試算もこのデータベースで行うことができますが、世界の研究者から求められている論文を掲載する魅力あるジャーナルを出版するため、自誌の個々の論文の被引用状況や、同分野の世界の研究トレンドを知り、さらには、同分野で最近注目されている研究者ならびに論文を知るなど、多様な活用が可能となっております。

最後になりますが、学会誌を良くしようとする会員皆様方の熱意とご尽力により、まもなく JPR 最初のインパクト・ファクターが公表されます。インパクト・ファ

クターの取得は JPR の長年の悲願でありましたし、これまでは申請を試みても受理されない時期もありました。そのような歴史を踏まえ、これまで本誌を支えて下さった歴代の編集委員長を始め、編集委員の方々、日本補綴歯科学会の会員および事務局の方々、さらにはエルゼビア・ジャパン株式会社にも厚く御礼を申し上げます。今後も現状に満足することなく、より高いレベルの国際学術誌として邁進していきたいと考えております。会員の皆様には、査読や投稿を含め、今後ともご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

岩佐文則(昭和大)



講演される志賀先生



初代編集委員長横山先生



前編集委員長窪木先生



矢谷理事長と感謝状を手にする現編集委員長の馬場先生

第1回補綴歯科臨床研鑽会「プロソ'14」開催報告

平成26年12月6,7日の両日、水口俊介（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野教授）を大会長として第1回補綴歯科臨床研鑽会「プロソ'14」が開催された。本会は公益社団法人日本補綴歯科学会の歴史の中で初の試みとして、補綴歯科臨床についてより品質の高い治療を国民に提供するため、臨床エビデンスとテクニックを提示しディスカッションすることを目的とした研鑽会である。補綴歯科専門医やその取得をめざす補綴学会会員はもちろん、補綴歯科臨床の技術、知識向上を望む全ての歯科医療従事者を対象としている。記念すべき第1回補綴歯科臨床研鑽会は、メインテーマを「審美歯科臨床のカッティングエッジ」として、この分野をリードする我が国トップクラスの歯科医師ならびに歯科技工士が一同に集められ、最先端の審美補綴臨床の技術とその背景にあるエビデンスに関する情報交換、共有が行われた。本会は席指定で行われたが、会場となった東京医科歯科大学M&Dタワー 鈴木章夫記念講堂は師走の忙しい中にも関わらず、事前参加申し込みの時点で定員の500名を越え満員となったため、同時中継するサテライト会場も同フロア内に設けられた。また、研修単位認定のために入退場のチェックを行うことにした。当初混雑を予想していたが、学会会員のご理解とご協力により滞りなく行うことができた。

研鑽会1日目、開会式にて矢谷博文理事長から研鑽会の趣旨や開催経緯について説明を頂き、本会の幕が

上がった。本会は4つのシンポジウムより構成され、シンポジウム1「審美補綴のための補綴前処置—アタッチメントレベルの管理、歯頸線の調和—」（座長：窪木拓男先生（岡山大学）、鈴木秀典先生（関西支部））では、審美歯科臨床を誰が行っても可能な限り同じ成果を達成できるように歯科審美についての目標設定がなされ、治療方法の定型化などを通して多岐にわたる審美歯科治療について整理することが試みられた。石田雄一先生（徳島大学）による「審美歯科治療の現状と治療のエンドポイント」では歯科において審美が何を意味するのかがまとめられ、佐藤洋平先生（鶴見大学）による「審美性を獲得するための補綴前処置」では診査、診断方法も含めて目指すべきゴールや選択する治療オプションに応じた前処置について整理された。脇智典先生（大阪大学）による「歯頸線の位置を変えないためにすべきこと、歯頸線の位置を変えるために出来ること」では審美先進国である米国での経験、また帰国後の多くの審美臨床症例について供覧され、臨床における勘所が示された。最後に宮前守寛先生（関西支部）による「補綴前の硬組織および軟組織のマネジメント」ではペリオの観点から、審美の長期安定性について示された。

シンポジウム2「欠損部歯槽堤の保存、再建（結合組織移植を含む）」（座長：細川隆司先生（九州歯科大学）、鮎川保則先生（九州大学））では、インプラント治療、また審美的に優れたブリッジ製作に重要な補綴



シンポジウム1 シンポジストの先生方



シンポジウム2 シンポジストの先生方

前処置としての欠損部歯槽堤の保存、再建を目的とした硬組織、軟組織の双方に対する介入についての講演、議論が行われた。木林博之先生(関西支部)による「審美修復におけるポンティックとそれに関連する歯槽堤の形態について」では審美領域欠損部で多く使用されるポンティック、またそれに対する欠損部歯槽堤のマネジメントについて過去の文献と症例を通して考察が加えられ、山崎章弘先生(中国四国支部)による「修復治療のための歯槽堤増大」では欠損部歯槽堤の吸収抑制および増大の方法について、またオベイトポンティックを生体にとって適した形態とするための各ステップの具体的な説明がなされた。正木千尋先生(九州歯科大学)による「エビデンスに基づいた欠損部顎堤の保存、再建のストラテジー」では抜歯後の顎骨吸収を最小限とするためにソケットプリザベーションや抜歯即時埋入インプラントなどが有効であるか議論されると共に、歯槽堤の再建のために骨移植、軟組織移植の適応基準および術式について最新のエビデンスと共に提示された。松井徳雄先生(貴和会歯科銀座ペリオインプラントセンター)による「欠損部歯槽堤の再建に対する硬組織、軟組織のマネジメント」では天然歯修復、インプラント治療における欠損部歯槽堤の再建に対する硬組織、軟組織のマネジメントについて、特に審美性や清掃性の観点から論じられた。

シンポジウム2終了後、M&Dタワー最上階である26Fファカルティラウンジにて懇親会が開催された。御茶の水のビル群の夜景を背景に、審美歯科臨床について、シンポジストを交え活発な意見交換がなされ、大いに盛り上がった。最後に大会長の好物の熱々のアップルパイが振舞われ、散会となった。

研鑽会2日目も活発なシンポジウムが行われた。シンポジウム3「クラウンカントウア、フィニッシュラインの設定とブラックトライアングルの処理(インプ

ラント治療を含む)」(座長:佐藤洋平先生(鶴見大学)、澤瀬隆先生(長崎大学))では審美補綴の基礎として、まず生体反応と材料の特性を熟知し、ルールを守って治療をすることが重要であることが再確認されることとなった。六人部慶彦先生(関西支部)による「歯周組織の安定を目指して」では生体の反応を考慮した天然歯におけるフィニッシュラインの設定方法、クラウンカントウアの設定とステップごとの具体的な方法について、また特に歯根間距離が正常ではない場合の対応についてノウハウが提供された。松永興昌先生(九州支部)による「審美性を考慮したインプラント上部構造の設計」ではインプラントにおける審美に関して、インプラントのポジショニングやアバットメントの選択が周囲軟組織の形態にどのような影響を与えるかお話し頂いた上で、天然歯との違いを踏まえたインプラント審美補綴の治療について講演頂いた。また、伊原啓祐先生(鶴見大学)による「ラボサイドにおけるクラウンカントウアへの対応 歯頸線と歯間乳頭への配慮」では歯科技工士の立場から審美補綴治療を成功させるために歯科医師に求めることをお話し頂き、より効果的な連携について議論が行われた。

最後のセッションである、シンポジウム4「CAD/CAMを用いた審美材料と技工技術の進歩」(座長:萩原芳幸先生(日本大学)、前川賢治先生(岡山大学))ではCAD/CAMを用いた補綴治療を成功に導くための方策と現状における問題点について議論が行われた。大谷恭史先生(ワシントン州シアトル開業)による「Digital Dentistryの現状と未来—補綴材料の選択、補綴設計および最新技術について—」ではCAD/CAMにより補綴装置を作製する際の材料選択基準および補綴装置の設計について考察頂くとともに、新しいDigital Dentistryとしてロボティクスに関してもご説明頂いた。土屋嘉都彦先生(九州支部、福岡歯科大学)によ



シンポジウム3シンポジストの先生方



シンポジウム4シンポジストの先生方

る「CAD/CAMは、従来法を超えているのか？」では天然歯、インプラント補綴におけるCAD/CAMの応用法についてお話頂き、今後の展望や問題点についてお示し頂いた。丸尾勝一郎先生（神奈川歯科大学）による「審美部位における単独歯および少数歯欠損インプラント補綴へのデジタル応用戦略」では審美部位の単独歯および少数歯欠損インプラント治療を成功に導くための、デジタル技術の応用について、生物学的および技術的側面からエビデンスを示しながら解説がなされ、田中晋平先生（昭和大学）による「無歯顎患者におけるデジタルデンティストリー—ボーンアンカーブリッジとインプラントオーバーデンチャー症例から—」では無歯顎症例に対するボーンアンカーブリッジとインプラントオーバーデンチャー製作のワー

クフローの現状と今後の展望について最新情報が提供された。研鑽会の最後の講演となった西村好美先生（関西支部）による「CAD/CAMの臨床現状と変革」ではCAD/CAMシステム導入後の15年のご経験を踏まえて、歯科技工士の立場からCAD/CAM臨床の現状と変革についてお話を頂いた。

以上、4シンポジウム、計16名の講師にご講演頂き、2日間にわたって審美補綴臨床について様々な考察、議論が加えられ、参加者の知識および技術の向上に大きく貢献したものと考えられる。本会開催にあたりご後援を頂いた一般社団法人日本歯科技工学会、公益社団法人日本歯科技工士会に深く感謝いたします。

水口俊介，関田俊明（医歯大）

公益社団法人日本補綴歯科学会
2014年度第2回疫学調査委員会・学術委員会合同シンポジウム

「補綴歯科学が担う口腔の健康と健康長寿—明るい超高齢社会の実現—」

平成27年1月11日(日), 9時~12時30分,
鶴見大学会館(横浜市鶴見区鶴見2-1-3)

矢谷博文理事長(平成25年度, 26年度)の肝入構想により『疫学調査委員会』が新たな委員会として設定された。委員は玉置勝司(委員長), 河相安彦(副委員長), 石垣尚一, 大野 彩, 菅沼岳史, 佐藤洋平, 築山能大, 山口泰彦, 高橋晃子(平成25年度幹事), 丸尾勝一郎(平成26年度幹事)で, 日本補綴歯科学会の歴史に残る疫学調査を検討し, 企画するために積極的な活動を行った。歯科補綴学がどのように国民の健康長寿に寄与しうるかに関するエビデンス創出のため, 大規模コホート研究や多施設臨床疫学研究を積極的に企画推進するために学術委員会との合同シンポジウムの開催を企画した。

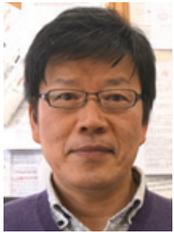
昨年度は, 第1回疫学調査委員会・学術委員会合同シンポジウムが2014年1月26日(日), 昭和大学旗の台校舎1号館7階講義室で開催された。シンポジストとして, 岩田真紀代先生(厚生労働省老健局老人保

健課)「介護保険制度のこれから~超高齢社会における歯科保健の役割~」, 鈴木隆雄先生(独立行政法人国立長寿医療研究センター所長)「科学的根拠に基づく自立支援と介護予防」, 平野浩彦先生(地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所, 社会科学系専門副部長)「超高齢社会の高齢者歯科学」, 池邊一典先生(大阪大学大学院歯学研究科歯科補綴学第二教室)「健康長寿についての歯科医学・栄養学・内科学・心理学の共同研究: 歯科補綴学からのアプローチ」であった。

昨年度に引き続き, 国内で実施中, または現在企画中の医科系データを含む疫学調査について造詣の深い諸先生をお招きし, 知識の集約, 本学会の関わり方や今後の活動の方向性について検討する目的で第2回合同シンポジウムを鶴見大学会館(横浜市鶴見区鶴見2-1-3)で開催した。

「これまでの疫学調査で行ってきたこと~補綴歯科学会との共同に向けて~」

新開省二先生(地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所)



東京都健康長寿医療センター(以下センター)の新開省二先生に「これまでの疫学調査で行ってきたこと~補綴歯科学会との共同に向けて~」題した講演をいただいた。新開省二先生は1998年, 愛媛大学から当センターの前身である東京都老人

総合研究所地域保健部門研究室長へ赴任され, 2009年より同センター研究部長を務められている。センターでは現在6つの自然科学系研究チームと3つの社会科学系研究チームに分かれ研究が進められており, 新開先生がリーダーを務められている「社会参加と地域保健研究チーム」は一貫して地域高齢者を対象とした疫学研究(1976年からの小金井研究, 1991年からのTMIG-LISA研究, 2002年からの草津研究)を行っ

てきており, これらの地道な研究活動からまさに健康長寿が叫ばれる「今」必要とされている興味深い成果について丁寧な説明をいただいた。

その中で, 現在補綴学会との共同研究に向けて検討を重ねている草津研究は, 群馬県草津町との共同研究事業であり, 65歳以上の在宅高齢者全員を対象とした来場型包括検診を通じ, 「健康余命」の規定要因の解明を目的とした観察型疫学研究であります。同時に虚弱予防を通じた健康余命の延伸を目的とした地域介入研究も併走され, 地域に根差し, 還元される点などの詳細について提示していただいた。

草津コホートは, 追跡対象者全員について, 異動情報(死亡, 転出), 介護保険認定情報, 医療費・介護給付費などが追跡できる体制をとられており, アウトカムが非常に明確に設定できること, また来場できない住民への悉皆的訪問調査も行い未来場者を含む高齢者の健康状態の確認を行っている点が特徴であるとのこと紹介をいただきました。現在, 延べ受診者総数7,335名であり, 観察型疫学研究ではセンターの社会科学系

平野浩彦専門副部長を中心に口腔の検査が実施されている。今後補綴学会がセンターと協力しながら、「健康長寿への補綴の関わり」を明らかにすることについて、

先生からは「高齢社会における補綴歯科学のプレゼンスがより高まるものである」との期待が寄せられている。

「疫学調査における歯科の可能性～地域における高齢者調査から～」

小原由紀先生（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔健康教育学分野）



今や日本の高齢化率は25%のほり、今後も上昇を続けることが見込まれている。一方、平均寿命と健康寿命には10～13年のギャップがあることが示されており、健康寿命の延伸が課題となっている。健康

寿命の延伸には、社会生活を営むために必要な機能の維持、および加齢に伴う機能低下の抑制が重要であり、加齢に伴い顕在化する身体および精神的諸症状や疾患をさす老年症候群の早期発見と早期対処が求められている。そのためには、適切な評価指標の設定と生活機能との関連性の把握が必要であり、地域在住高齢者を対象とした調査事業における実

態把握が不可欠である。地域の高齢者を対象とした包括的健康調査の利点としては、口腔のみならず運動機能や認知機能、栄養状態、心理社会的側面、生活機能等の高齢者の生活に影響を与える要因についても包括的に評価できること、さらに、専門職が実際に診察することで口腔内状況や口腔機能を客観的に評価できることなどが挙げられる。一方、調査項目が多く、調査対象者の身体的・心理的負担が比較的大きいため、定量的かつ簡便で侵襲性の少ない評価指標の選定が求められる。

本講演では、群馬県草津町、東京都板橋区等の地域在住高齢者を対象とした調査について、その概要、およびこれまでに得られたデータをご呈示いただいた。さらに、解析結果から見えてきた都市部と地方との相違や解決すべき問題点、および疫学調査における歯科の可能性についてご解説いただいた。

「観察コホート研究のデータ解析」

新谷 歩先生（大阪大学大学院医学系研究科臨床統計疫学寄附講座）



無作為割り付けの行われていない観察研究では、さまざまな患者の背景によって治療法が選択されるため、治療群とコントロール群で患者の特性が異なり、アウトカムの直接比較が困難となる。とくに薬剤比較研究では、解析でこの違いを無視し

てしまうと、投薬群はコントロール群に比べ病状が悪化していることが多いため、薬剤の効果なし、またはあたかも害であるかのような思いもかけない結果に結びつくことがしばしば起こる。このように比較群間で患者背景の異なりから薬剤の効果の間違って解析してしまうことを交絡と呼び、多くの観察研究で問題とされている。

また、多変量回帰分析ではモデルに投入する調整因子の中で一つの因子でもデータが欠損する場合は、データ欠損の起こった被験者の全てのデータが解析から外される。このため、調整因子の数が多ければ大きいほど欠損データによって削除される被験者が増えるので、欠損データによる結果への影響が大きくなる。New England Journal of Medicine や JAMA など、多くの医学系ジャーナルでは、最近では欠損データの扱いなどを明記することが推奨されている。

本講演では交絡の調整法として、ロジスティック回帰、コックス比例ハザード回帰モデルなど多変量回帰分析について、そのコンセプトや調整因子の選択法などを分かり易くご説明いただくとともに、欠損データによる補完法など、観察的コホート研究における統計解析の基本的考え方について分かり易くご解説いただいた。

玉置勝司（神歯大）

2014 Asian Academy of Prosthodontic (AAP)参加報告

第9回アジア補綴学会が、2014年11月21～23日に台湾・台北で開催されましたのでご報告させていただきます。台北の中心地、永康街にほど近く、ランドマークでもある台北101を望むことができる場所で学会は行われました(写真1)。

AAPは前身であるInternational College of Prosthodontics, Asian Chapter (ICPAC) ミーティングの鹿児島(1994)をはじめに、1998年韓国・ソウルで第1回AAPミーティングが行われ、2年ごとに開催されています。2014年に第7回を迎え、西はアラブ首長国連邦からの参加者もみられ、数多くの国から参加者と演題発表がみられました。

大会初日には、オープニングセレモニーが行われ、大会長であるProf. Chun-Cheng Hung (Kaohsiung Medical University)の挨拶後に、各国の参加者が紹介され、歓迎セレモニーとして中華獅子舞が披露されました(写真2, 3)。

学術大会はシンポジウム・講演、ポスターによって構成され、日本補綴歯科学会からは古谷野潔前理事長(九州大学)、馬場一美理事(昭和大学)がゲストスピーカーとして講演されました。

またポスター11演題がJPSから発表されました。本大会ではインプラント補綴治療における審美性の回復、顎関節症におけるスプリント療法、デジタル歯科臨床などの様々なテーマについて講演がなされました。

大会初日の夜には、ガラディナーが催され各国の参加者と友好を深めることができました。今後もアジア各国の組織と連携を図ることは、補綴分野における研究、臨床の発展に寄与することを期待させました。

今井 遊(九州大)



写真1 台北のランドマーク台北101



写真2 9thAAP 開会式



写真3 オープニングセレモニーで披露された中華獅子舞

支部学術大会報告

●東北・北海道支部学術大会

平成 26 年 10 月 25 日（土）、26 日（日）の両日にわたり、平成 26 年度公益社団法人日本補綴歯科学会東北・北海道支部総会・学術大会が開催されました。第 40 回となる記念大会であり、「補綴歯科治療を検証する」をメインテーマに企画されました。

25 日には、関根秀志先生（奥羽大学）による「インプラントを正しく理解しよう」と題する市民フォーラムと、尾澤昌悟先生（愛知学院大学）、武部 純先生（岩手医科大学）が担当された専門医研修会「日本補綴歯科学会専門医に求められる顎補綴治療」が開催されました。26 日には、赤川安正先生（奥羽大学）による特別講演「超高齢社会における歯科補綴の新たな道」とシンポジウム「オールセラミッククラウンを検証する」が行われました。後者では、大学の立場から小峰 太先生（日本大学）、臨床家の立場から千葉

豊和先生（東北・北海道支部）、開発の立場から佐藤拓也先生（株式会社ジーシー）がシンポジストを務められました。これらの企画は、それぞれの治療法もしくは補綴歯科治療自体を「検証」し、今後の展開を示唆するものであり、参加者にとってたいへん貴重な機会となりました。また、これらの講演やシンポジウムを会期に納めるため、一般演題の多く（14 演題中 11 演題）はポスター発表となりました。

懇親会は 25 日夕方に開催されました。記念大会ということで、歴代の支部長経験者から担当時の逸話などのご披露があり、地域歯科医師会の先生方も交えて夜遅くまで親睦を深めました。本大会には、来賓を含め約 200 名のご参加をいただき、活発な討論によって充実した学術大会となりました。この場をお借りして関係各位に御礼申し上げます。

（奥羽大 山森徹雄）



シンポジウムでのディスカッション（左から小峰先生、佐藤先生、千葉先生）



大会運営スタッフ

●東京支部学術大会

平成 26 年 11 月 9 日（日）に昭和大学旗の台キャンパスにおいて、尾関雅彦大会長、昭和大学歯学部インプラント歯科学講座の主幹により公益社団法人日本補綴歯科学会東京支部総会・第 18 回学術大会が開催されました。

演題数は一般口演が 21 題、専門医申請ケースプレゼンテーションが 6 題でした。また特別講演は 2 題あり、昭和大学歯科補綴学講座の馬場一美教授に『歯科補綴治療のパラダイムシフト — デジタルワークフローがもたらすもの』と題して、デジタル技術が歯科

補綴治療をどのように変えつつあるかを分かりやすく解説して頂き、また同大学客員講師の安藤彰啓先生には『見えない物を診る口腔顔面痛』と題して、痛みのメカニズムや多様性、および多因子性慢性疼痛の診断法について簡潔明瞭に講演して頂きました。

天気予報では曇りまたは雨とのことで、学会参加人数が激減するのではないかと非常に心配されましたが、幸いにも当日の朝は曇り空で夕方には晴れ間も見られ、総数 405 名の先生に参加して頂きました。約 250 名収容のメイン会場は概ね満席で、一部の先生方にはサテライト会場で聴講して頂く時もあり、また

ケースプレゼンテーション会場でも活発な質疑応答がなされていました。

総会では第19回学術大会が東京医科歯科大学の主幹で開催されることが承認されました。学術大会終了後には昭和大学入院棟17階タワーレストランにおい



大会運営(昭和大学歯学部インプラント歯科学講座)

て素晴らしい夜景を眺めながらの懇親会が開催され、多数の会員の方々の歓談の中で優秀学会発表賞に選出された3題が発表されました。宴の終盤には、一般口演4題、ケースプレゼンテーション2題と今回の学術大会では最大の演題を出して下さった東京歯科大学櫻井 薫教授からお言葉を頂くなど、最後まで和やかな雰囲気の中、学会を無事に終えることができました。これも東京支部の会員の先生方のおかげと、心から感謝しています。(昭和大 石浦雄一)



特別講演I(馬場一美教授)

●西関東支部学術大会

公益社団法人日本補綴歯科学会西関東支部学術大会が平成27年1月25日(日)に小川 匠教授(鶴見大学歯学部クラウンブリッジ補綴学講座)を大会長とし神奈川県歯科医師会との共催で神奈川県歯科医師会館にて開催されました。教育講演では、「補綴治療の新たなエンドポイント—咀嚼機能の維持・回復と健康長寿—」と題して花田信弘教授(鶴見大学)は「栄養管理」、野村義明准教授(鶴見大学)は「歯周病検査」、武内博朗臨床教授(鶴見大学)は「保健指導」、重本修何助教(徳島大学)は「機能評価法」について講演され、補綴治療のエンドポイントに形態と機能の「回復」だけでなくその「維持」も含めることの意義と、客観的な機能評価に加えて栄養管理、多職種連携、および食育の必要性が示されました。特別講演では、津賀一弘教授(広島大学)が「舌圧検査と口腔機能—先端歯科補綴学の挑戦—」と題して開発にたずさわられた舌圧測定器と口腔機能療法について講演され、口腔機能の改善から国民の健康増進を目指す取組を紹介されました。その他、一般講演と専門医ケースプレゼンテーションあわせて22演題の発表が行われ、優れた発表を行った若手研究者に授与されるイーストレキ賞を鶴見大学の林 邦

彦先生と小澤大輔先生が受賞されました。また、24日(土)には、同会場にて木本克彦教授(神奈川歯科大学)、疋田一洋準教授(北海道医療大学)による生涯学習セミナー「ハイブリットでのCAD/CAM冠の対応」と、小久保裕司先生(鶴見大学)、陸 誠先生(コアデンタルラボ横浜)による市民フォーラム「安心、安全なインプラント治療で快適にすごす!」が併催されました。二日間で210名の参加者を迎え、活発な質疑応答により大変有意義が学術大会となりました。

(徳島大 重本修何)



特別講演: 舌圧測定器と津賀一弘教授(広島大学)

●東関東支部学術大会

平成 27 年 2 月 22 日 (日) に水戸プラザホテルにおいて主任教授の會田雅啓大会長の元、日本大学松戸歯学部クラウンブリッジ補綴学講座が準備を行い、平成 26 年度日本補綴歯科学会東関東支部総会・第 18 回学術大会が開催されました。演題数は、一般口演 6 題、専門医申請ケースプレゼンテーション 2 題でした。今年もこの時期、水戸偕楽園では梅の花が咲き始め、全国から多くの見物客で賑わいを見せているなか、本学会の参加者は 117 名と昨年とほぼ同数でした。

市民フォーラムでは、「おいしく、楽しく、美しくなる「摂食機能」の実力一齢を重ねるたびに喜びと誇りが膨らみますー」と題する講演を日本大学歯学部摂食機能療法学講座教授、植田耕一郎先生からいただき、会場は満席で立ち見の参加者が出るほどでした。笑いあり、涙ありの白熱した講演であったという間の 2 時間でした。

生涯学習公開セミナーでは、「ハイブリッドレジンの CAD/CAM 冠での対応」というテーマが与えられました。

福岡歯科大学咬合修復学講座冠橋義歯学分野の佐藤博信教授からは、一保険適応に至る背景と臨床応用についての考えかた一と題して、最近の CAD/CAM 補綴の全体的動向と「歯科用 CAD/CAM システムを用いたハイブリッドレジンによる歯冠補綴」導入の背景についてお話をいただきました。広島大学病院咬合・義歯診療科の阿部倉仁診療准教授からは、本治療を成功に導くための具体的な支台歯形成、咬合調整、研磨および装着の重要ポイントについてお話をいただきました。最近の注目されているテーマであるため、補綴学会の会員の先生はもとより茨城県歯科医師会の会員の先生他、多くの先生方が参加されました。

学術大会を通して、一般口演における最新の研究成果から市民フォーラムでは一般の方への講演もあり、生涯学習公開セミナーでは日常臨床にすぐに役立つ有用なお話で内容の濃いものだったと思われま。学術大会を滞りなく終了できましたのは、東関東支部の会員の皆様およびその他の関係者の皆様のご協力があったおかげであり、この場を借りて御礼申し上げます。

(日大松戸 大村祐史)



口演発表会場



専門医申請ケースプレゼンテーション発表会場